

# 読売歌壇

うら若き娘ひとりが献血を訴へて立つ夕暮れの街  
 【評】輸血用の血液が足りないらしい。献血を呼びかける若き女性のひたむきな声。夕暮れの街、という結句の設定がとてもうまくできていてありありと場面が浮かぶ。  
 ステージも余命も聞かず 病院の帰りに買ひし白のシクラメン 水俣市 角田 聖子  
 【評】重篤な病の宣告を受けた。しかし詳しいことはあえて聞かずにきた。なるようにしかならないのだ。花屋できれいなシクラメンを買って帰る。今年の春がそこに来ている。風もなく椿の花が落ちて来て鯉が目覚める春曉の池  
 松山市 夕月 秋人  
 【評】王朝和歌風の雰囲気がある一首。池の水面に椿が輪落ちて、鯉が目覚めた。あやかかな春のおとずれ。  
 生まれたてなるかなしみを抱くこころハローモニカ吹く少年のあり 垂水市 岩元 秀人  
 岩清水飲みてみぬかと誰か置くアルミのコップに春の陽の射す 群馬県 真庭 義夫  
 春兆す池に浮かびて死にたりし金魚弔ふ梅の花 横濱市 古山 智子  
 帝釈天数千体の彫刻は黙するが故に民を諭せり 鶴岡市 佐藤 繁子  
 陽にさらす 角田市 豊岡 浩一  
 テレビより「ある日のこと」でございませう市原悦子の声に聴き入る 船橋市 山崎三千子  
 君が好きすぎすぎ好きと奇越したる男と歩んで六十八年 芦屋市 宮本 允子

## 小池 光選

蕪村の句口ずさみつつ砂浜に座して沖ゆく船を見てをり 笠間市 小沢まさみつ  
 【評】蕪村の句「春の海終日のたりのたりのかな」を口ずさんでいるのだろう。「のたりのたり」は砂浜に座る作者の心境でもある。沖の船を描いたことで情景に遠近感が出た。  
 じゅうぶんに大人の貴女が決めたなら立とうかわたしは灯台となり 我孫子市 安倍かおり  
 【評】「貴女」は作者の子か、あるいは後輩かもしれない。相手の決断を尊重し、灯台となつて見守つてゆこう。そんなふうにし言葉を送っている。「立とうか」がじつに力強い。考古学的調査のように子の嫁が卒業アルバムに私を探す 静岡市 柴田 和彦

## 栗木 京子選

亡き人の歌集の中の「君」は今元気に暮らしているのでしょうか 大阪市 三木モワレ  
 【評】歌集の中で出会った「君」は、その姿をとどめている一方、その後の姿を知ることができなくなった。死とは、その人につながる誰かへの思いを含めて失われることなのだ、あらためて感じさせられる。  
 打ちたてのお蕎麦みたいた玄關の前で花粉を落とすわたしは 東京都 富見井高志  
 【評】家の中に花粉を持ち込まないための習慣。なかなか面倒なことだが、前向きな比喻が、気分を明るくしてくる。言葉の功名だ。秋風を抱くテトラのティーバック巨人となつて泳がせる指 東京都 石井 しい

## 俵 万智選

病む故に梅雨が辛いと言ひし子の葬儀の朝は快晴となる 香取市 人見羽津江  
 【評】湿気が辛いお体だったのでしょう。ようやく肉体の苦しみから解放されたわが子の心を表すように、快晴が広がる葬儀の日。子を悼む親の気持ちに満ちた一首でした。  
 なごり雪やがて小雨に自らを跡形もなく消し去るために 高岡市 池田 典恵  
 【評】雪が小雨となり、そして流れ去つてゆく。雪が降った痕跡は何も残らず、季節は移ろつてゆく。そのようにしてこの世界は、無限の時を重ねてきたのです。  
 天気しか書くことがない日記でも白いページは余白にあらず 山形市 柏屋 敏秋

## 黒瀬 珂瀾選

【評】五十年近く前の卒業アルバムを想像した。そこに写る作者は青年。見つけるのはむしろかしらうだ。上句の比喻が機知に富む。  
 半年間荒れ放題の庭に咲く花の精に見ゆ香子の花は いわき市 熊坂 正志  
 亡き嫁も見守っているか吾が孫は大学四年就活 チャレンジ 流山市 角田 勇  
 カザルスのチェロに憂いがとける宵あすがあるからまた希望もつ 伊賀市 福沢 義男  
 堤防の草ふも足が覚える消えた実家の裏のあぜみち 柏原市 那須恵美子  
 挨拶の後はスマホを示し合い歩数を競う朝の公園 尾張旭市 梶川 俊雄  
 川沿いの菜花の中に分けければ我が影もまた夕景に入る 調布市 高坂 愛子  
 買いてすぐ国語教科書終りまで一気に読みし小学生の我 焼津市 山下 邦子

【評】テトラ型のティーバックからテトラポッドへと連想が飛ぶ楽しさ。優雅なお茶の時間、想像力でいっそう豊かになる。  
 水たまりをややおおげさに踏いでくこれを私の踊りとしませう 東京都 鳥さんの臉  
 カーリングのストーンのごと川端につどいてねむる六羽のマガモ 春日部市 宮代 康志  
 終末は週末のような気軽さで来るか日米首脳会谈 熊本市 夏風かをる  
 テトリスが下手くそな人かのように物が積まれていく俺の部屋 所沢市 ラング  
 行き先が異なるだけで用意するものは似ている旅と入院 堺市 一條 智美  
 また一人影を消すこと来なくなる趣味の集いは明るくこわい 宇陀市 渡辺 勇三  
 ファミレスの猫口ポットは人見知りせず働きの風邪も引かない 千葉市 芍薬

【評】他人には何の代り映えの無い日記の空白に見えても、本人にとっては言葉にはならない記憶が宿る。余白の美学でしようか。  
 児童らの命ではなく終戦を原油価格で語る政治家 京都市 寺西 和史  
 父の最期を今見届ける思いして戦火に沈む遠き船見る 那須塩原市 野崎 征子  
 白妙の吾妻の山にくつきりと雪うさぎ見ゆ種時きのころ 福島市 富山 貞治  
 帰り道解からぬと言ふ老婦人 七十路の吾が道かも知れぬ 福川市 今西 佳子  
 対岸が見える内海 手を振って一人芝居もそう悪くない 市原市 十条 坂  
 千円の処理券貼られた介護用ベッドから沈丁花のほのか 福岡市 水川 海  
 一瞬の風にあおられ帽子飛ぶ春まだ浅き四万十の旅 丸亀市 市橋 康子

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌壇(俳壇)、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから ◇毎週月曜日に掲載 右の影絵はうさぎ